巻頭言――『九州の山岳霊場』の発刊に寄せて――

西谷　正

私たちの暮らしは、原始・古代以来現代においても、大きく山と里と海、山と海を結ぶ川を舞台として展開してきた。山はいうまでもなく河川の水源として、また、動植物資源の供給地として人々に恵みを与えた。しかし一方で、山は火山災害[桒畑　二〇一九]を、そして、河川は水害を、さらに海は地震に伴う津波[金子 二〇二一]など、自然災害には時に人智を越えるものがあり、人々はそれぞれに対する畏怖の念から信仰が生まれ、そして、育まれた[西谷 一九九六]。

さて、山がちな日本列島には、世界遺産に登録された「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」や「紀伊山地の霊場と参詣道」をはじめとして、各地に数多くの霊山・霊場が知られる。なかでも九州には、大峰山・羽黒山と並んで、日本の三大修験霊場の一つに数えられ、山岳信仰の霊場として全国的にもよく知られる英彦山を筆頭に、宝満山・脊振山・求菩提山・六郷山・阿蘇山・霧島連山、そして高良山などの霊山を擁している。そのような霊山の数の多さは、全国的に見ても特筆されるといえよう。

そこで、九州における山岳霊場遺跡に対する調査・研究の歩みを振り返ると、本九州山岳霊場遺跡研究会顧問の森弘子氏が指摘されるように、一九七〇～一九八〇年代に一つのピークがあった[森 二〇一一]。すなわち、英彦山[朝日新聞西部本社 一九八二・一九八三]・宝満山[小田 一九八二]・六郷山[大分県教委 一九七六・一九七七・一九八二]・脊振山[東脊振村教委 一九八〇、脊振村教委 一九八八]など、北部九州における中世以後の天台密教系の山林寺院に対する基礎的調査と研究が相ついで行われた。その間、求菩提山では、福岡県立求菩提資料館が昭和四十九年(一九七四)に開設され、また、ここに事務局を置いて、昭和五十五年(一九八〇)に、西日本山岳修験学会が発足したことは、この分野の調査・研究にとって、その意義は大きい。

また、本会事務局長の岡寺良氏によると、その後しばらく調査・研究は継続されなかったが、平成二十二年(二〇一〇)前後の頃から、九州のみならず全国的にも山林寺院が注目されるようになっていった[山の考古学研究会 二〇〇三・二〇一〇・二〇二〇、時枝 二〇一二、岡寺 二〇一七、狭川 二〇二一]。その後の求菩提山の調査の契機は国の史跡指定を目指したものであったが[豊前市教委 二〇一一]、ことに新たに発見、調査された首羅山[久山町教委 二〇〇八・二〇一〇・二〇一二・二〇二〇]とともに、国指定史跡を目指して、宝満山[太宰府市教委 二〇一三]や英彦山[添田町教委 二〇一六]に対する本格的もしくは総合的な調査が行われた。

さらに、その頃、首羅山に残る薩摩塔や宋風獅子などの中国南部系石造物[井形 二〇一二]が話題を呼び、山林寺院への関心が一段と高まっていった。そうした趨勢を背景として、九州における山林寺院の全容を解明するべく、平成二十三年に九州山岳霊場遺跡研究会が発足した[岡寺

二〇一七]。その際、事務局を九州歴史資料館に置き、同館の全面的な協力を得て、研究会の回を重ねた。ちなみに、九州歴史資料館では令和三年度特別展として、「九州山岳霊場遺宝—海を望む北西部の山々から—」が開催された[九州歴史資料館 二〇二一]。その内容は、九州北西部の大陸との交流の痕跡を色濃く残す筑前と肥前を対象に九州山岳霊場遺跡研究会の調査・研究の成果に基づくものであった。

さて、前述の通り、近年、福岡県内においては山岳霊場遺跡の調査と研究は盛んとなってきているが、県内はもとより九州の各地域における山岳霊場遺跡の包括的把握は、豊後の国東半島の六郷山などごく一部にとどまっているのが現状であった。そして、各個事例が蓄積されている状況が見られるとはいえ、研究者個人や自治体レベルでの遺跡単体の調査では、その成果を総合的、相対的に評価することも難しい。そして、遺跡の十分な保存、積極的な活用へと結び付け難い現状があり、事実、山の遺跡の保存や環境の保全に支障をきたしている。

このような憂慮すべき現状に少しでも寄与すべく、九州各地の山地に所在する仏教・神道・修験道などの信仰関係遺跡を「山岳霊場遺跡」と位置付け、それらの調査事例を把握し、また研究者や行政担当者間の情報共有の場を持つことを目的として、前述の通り、「九州山岳霊場遺跡研究会」を設立し、平成二十三年(二〇一一)八月二十日に第1回の研究集会を開催する運びとなった[岡寺 二〇一七]。以下に、第1回から最終回となった第11回までのテーマを列記すると、左記の通りである。

第1回　北部九州の山岳霊場遺跡—近年の調査事例と研究視点—
第2回　脊振山系の山岳霊場遺跡—脊振山・雷山・怡土七ヶ寺—
第3回　首羅山をとりまく聖なる山々—糟屋・鞍手の山岳霊場遺跡—
第4回　国東半島の山岳霊場遺跡—六郷満山の寺院と信仰—
第5回　霧島連山の山岳霊場遺跡
第6回　多良岳と山麓の霊場遺跡
第7回　英彦山—信仰の展開と転換—
第8回　肥後の山岳霊場遺跡—池辺寺と阿蘇山を中心に—
第9回　高良山と筑後の山岳霊場遺跡
第10回　求菩提山と豊前の山岳霊場遺跡
第11回　宝満山の古代山岳信仰

その間に達成された調査・研究の成果は、右記の十一回に及ぶ研究会で毎回発行された資料集に蓄積されているが、このたびさらに総括のための研究会を開催することになり、それに合わせて総括的な論文集として、本書『九州の山岳霊場』を発刊する運びとなった。ここでは、これまでの研究会で発表された研究成果や紙上報告に加えて、その後に進展が見られた分野については新たに執筆された論文、さらには研究会で取り上げていない山岳霊場などに対する研究なども含めて、本書が刊行された次第である。本書の刊行を通して、九州はもとより全国の山岳霊場遺跡研究が進展することを祈念するとともに、冒頭で述べたように、現代社会に生きる私たちが、山とどう向き合っていくかという命題を考える上での一助になれば幸いである。

ところで今、振り返ってみると、筆者にとって印象に残る一枚の写真がある。それは、第5回研究会の資料集の表紙を飾る、霧島連山の中核をなす高千穂峰山頂に立つ鉄製の「天の逆鉾」である[森田 二〇一七]。見るからに山岳信仰における依り代(磐座)の景観を呈する。ここで「天の逆鉾」に祈りを捧げたのは、推測するに山麓の里人たちではなかったろうか。里人たちは、度重なる霧島連山の火山爆発の鎮静祈願から、そのような信仰が生まれたといわれている[新東 二〇一八]。里人たちとい